



対話の記録

ドキュメンタリー映画

鑑賞+座談会

対話の記録

ドキュメンタリー映画『ぼけますから、よろしくお願ひします。』鑑賞+座談会

2019年4月13日

オーディトリウム(水戸芸術館現代美術ギャラリー 第7室)

企画協力／進行:山田タポシ(Web制作デザイナー／ラジオパーソナリティ)

参加者:99名(うち座談会34名)

認知症を患い始めた87歳の母と、その面倒を見る95歳の父——離れて暮らす年老いた両親の姿を、テレビディレクターである実の娘が記録したドキュメンタリー映画『ぼけますから、よろしくお願ひします』。この映画の鑑賞会とあわせて、介護や看取りにまつわる対話の場を開いた。進行役を務めるのは、水戸市在住のWeb制作ディレクター山田タポシ氏。山田氏は映画通であるとともに、認知症の父と胃がんの母の介護経験者でもあり、それぞれの看取りまでを自身のSNSで包み隠さず、ときにユーモアを交えながら発信しつづけた経験がある。座談会は、山田氏の会場への問い合わせから始まった。

山田:まず、映画を観終わった今、感じていることや気持ちをシェアしてみましょう。

参加者A:私は、この映画が自分の故郷にいる親への恩返しというか、そういうことについて考える機会になると感じています。

参加者B:父を認知症で亡くし、母と暮らしています。私には子どもがないので、自分が認知症になったときに看てくれる人はいないですが、映画を観ていて涙がとまらなくて、この涙の理由がいったい何なのか自分でもわからず、みなさんの話を聞いてみたいと思っています。

参加者C:観るのにとても体力の要る映画でした。実際に自分がこの体験をしたら、今感じているしんどさの比ではないくらい大変なのだろうと実感して、それが怖いなという思いと、それに対応するために、親や親戚、まわりのみんなを含めて勉強したいなという気持ちです。

参加者D:母には本当は優しくしたいと思っているんですが、いつも冷

たい関係になってしまっていて、今日は介護について自分自身が見直すきっかけになったらいいなと思っています。芸術館で映画を鑑賞し、その後、座談会に参加するというのは私にとって初めてのことでのことで、興味がありました。

参加者E: 映画で観た内容がこれから自分たちに起こる話なのだということを実感し、胸がいっぱいです。

この日、座談会に参加した27名のうち、認知症の介護経験者が9名、また病気の種類を問わず、看取りを経験した人も同じく9名いた。山田氏が認知症を患った自身の父の介護経験を語る。認知症介護には非常に根気が必要であること、介護する側が苛立ちを抑えられず、つい声を荒げてしまう様子などが話された。

参加者F: 映画の最後10分くらいのところで、リンゴがたくさん映るシーンがあったと思うんですが、私の認知症の母も同じものをたくさん購入していました。認知症の始まりのサインのひとつとして注意したほうがいい行動パターンだと思います。

山田: 最新の研究では、認知症予備軍の25%くらいが生活に支障がない程度まで戻るケースも報告されています。そのためには、何よりも専門医の診断による早期発見が必要です。今は、病院に「物忘れ外来」という専門窓口を設けている病院もありますからね。なかなかそこに連れていくのは難しいんですけど。本人も嫌がるし、家族もそこで病名を確定させるのが怖かつたりする。でも、早いに越したことはないです。それと、認知症のことをよく知っておくことが大切です。無知ゆえの恐怖感が必要なことを遠ざけます。知つていれば、怖くても立ち向かうことができると思うんです。

認知症になっても残る「本人らしさ」

山田: 映画の中にもありましたが、認知症が進んでも、ときどき“本人”

が戻ります。まったく戻らない方もいますが、戻ったときは本人も相当な不安に襲われて混乱しますし、戻ったり戻らなかつたり波があるので、認知症の人との対話は本当に根気がいります。でも、ボケのコントみたいな感じもあるんですよね。

参加者G:私の母も認知症でしたが、最期まで本人らしさが戻ってくる瞬間はあって、そこには子どもである私を優しく気遣う母が残っていました。それが希望でもあり、切なくもあるんですが、本人らしさがあるということをお守りにできればと思います。私の母の場合、幻覚がひどかったので、ちょっと小太りのおじさんが自転車に乗っているのを見て、「ねえ、ほら、見て、ブタが自転車に乗ってる!」とかよく叫んでいたんです(笑)。そういう場面を介護する側が楽しむように、自分で工夫できるといいと思うんですよね。そうすれば、介護生活の中に、辛いだけじゃない、少しほっとする時間もできると思います。

参加者H:映画の中で、認知症のお母さんが怒られたとき、一瞬ポカンとなって、そのあと激しく怒り返すシーンがありましたよね。今私には4歳と5歳の子どもがいるのですけれど、そういうところは子どもと本当に似てるなと思いました。

山田:それもよく言われますね。認知症は、子育てとは逆にだんだんいろいろなことができなくなっていくプロセスですが、子育てとそっくりなところは確実にあります。本当に子どものように無邪気になっていく姿も見られますしね。

参加者A:私も、自分の親だからと責任感でなんとかしなきゃと思ってしまうこと自体が、小さな考えだったなと思いました。家族みんなで、子どものしつけと同じように、あたたかく見守っていればいいんだと、後になって気づきました。

参加者I:私は、社会人3年目で、実家が埼玉で長男なのですが、勤務地についてあまり深く考えずに茨城に就職しました。今、お話を聞いていて、親との距離というものがすごく大きいと感じましたし、認知症について

てももっと知らなければと思いました。大学の教養の段階からこういう話を聞ける場があつて、就職の前に考える機会があればいいなと思いました。

参加者H：映画でも、娘である監督が東京で働きながら、たびたび広島に住む両親を訪ねていますが、私も出身が大阪なので、水戸で仕事をしている限り、親と一緒に病院に行くなんて無理なんです。今おっしゃった通りで、就職するときにはそこまで考えませんでした。

山田：たしかに病院に一緒に行ければいいのですが、物理的に難しい場合もあると思います。完璧を求める看護師側が疲弊してしまうので、そうならないように頃合いを見つけるのが必要だと思います。親と子の関係や介護に「正解」はありません。それぞれの関係、それぞれの思いで、できるだけ後悔しない選択ができればいいと思います。

介護によって取り戻す、親と子の関係

参加者J：私の母は、脳梗塞からの体の不自由と言語障害があり、そろそろ介護期間が10年になります。子どもの頃から説教ばかりする母の存在がすごく苦手で、遠ざかりたい一心で過ごしてきました。ですが、今、介護をするようになって初めて、母と近い距離が取れるようになり、この体験があったからこそ、母との関係が取り戻せたという喜びを、ちょっと妙な言い方ですが、感じています。今は筆談なども用いてコミュニケーションは確実にとれているのですが、この関係性に認知症が入ってくることがすごく怖いと感じます。今日、映画を見て、みなさんのお話を聞いて、なお怖くなるところもあり、でも、少し対処法がわかつたところもあるので、これからもいろいろと考えていかなくてはと思っています。

山田：人にもよりますが、介護生活を通して親との関係の修復や再構築ができたと思う人は間違いないいらっしゃいます。今は認知症の研究が進み、原因も少しづつわかり始めています。脳内のネットワーク損傷と老廃物排泄の機能低下が、脳機能を衰えさせるというのも認

知症の一因とされ、それを予防する生活習慣も紹介されています。「NHKスペシャル」では、こうした認知症の先端治療について特集しており、とても参考になります。有料ですが「NHKオンデマンド」などで視聴可能です。

そして、突然、意志疎通ができない状態に陥る場合に備えて、延命措置をするかしないかなど、最期についてあらかじめ本人と相談しておくことも、とても大切です。それによって看護する側の後悔が減ります。その意味でエンディング・ノートは助けになります。とはいっても、本人の意志は変わるので……。

山田氏は、暴力的になるなど人格が変わったように見える認知症の人にも、元気だった頃のその人らしさというのは必ず残っていることを繰り返し述べた。座談会の最後には、家族と介護や看取りについて話し合う一助になればと、介護や看取りを扱った映画、ドキュメンタリー、漫画などのリストが山田氏から参加者に配布された。

対話の記録

ドキュメンタリー映画『こんばんはⅡ』鑑賞+座談会

2019年5月1日

オーディトリウム(水戸芸術館現代美術ギャラリー 第7室)

企画協力／進行:矢代貴司(こども学校プロジェクト代表)

参加者:48名(うち座談会20名)

「学びたい」という切実な願い、それを実現する夜間中学校。胸を張って生きていくために不可欠な学びを、学齢や国籍を超えて懸命につかもうとする人々をめぐるドキュメンタリー『こんばんはⅡ』。本映画は全国に夜間中学校を普及させる活動の一環として、2019年に制作普及委員会により製作された。前段には同じ森康行監督による『こんばんは』(2003)がある。座談会当日、森監督と映画に出演する夜間中学校卒業生、制作普及委員会の方々が来場し、夜間中学の現状や必要性を詳しく説明。水戸にある任意団体こども学校プロジェクトの代表を務める矢代貴司氏を進行役に、参加者らによる活発な対話が展開された。

矢代:私の中には「学校って何だろうか」、「学びって何だろうか」という2つの問い合わせずっとあり、この映画をきっかけにみなさんと語り合えたらと思っています。

参加者A:『こんばんはⅡ』に登場した者です。私は取手在住で、柏の自主夜間中学に通っているんですが、茨城の県南にも、自主夜間中学や公立夜間中学ができればいいと思います。映画の最初の方のインタビューで、「タイマン売られてボコボコにされた」っていうくだりがありましたが、命の危険を感じて登校拒否を始めたという経緯があります。その後、国立大病院の児童精神科とかフリースクールをあたつたのですが、フリースクールは非常にお金のかかるところで、学ぶ機会を逸してしまった……学力を失って、落ちこぼれになるという非常に悔しい思いをしました。

森:『こんばんはⅡ』を監督した森です。日本がバブルで狂乱の時代だったとき、私の住んでいる取手で1990年から91年にかけて、見城慶和先生という夜間中学の先生が「豊かな日本の中で」という題名で

講演をしました。豊かな日本に義務教育を受けていない人たちがいて貧しさがつづいていると同時に、新しい問題が起こっているという話でした。あの講演が映画製作のきっかけです。

『こんばんはII』では、なるべくたくさんの学校、自主夜間中学を撮り、外国人、いじめや不登校など現代の問題を含めて、撮られた映像の向こう側にある現実を考えもらいたいと思いました。いじめ、不登校の問題を抱えた人や、残留孤児3世、難民キャンプで育ったミャンマーやカンボジアの方々が映画に出てきます。人を通して世界を見てほしい。夜間中学から世界につながっている。そこから世界に目を向け、同時にもう一度世界から日本を見る。日本は外国人労働者をいっぱい受け入れる制度を政府がつくった。文化も言葉も違う外国の人たちと一緒に、私たちはどうやったら地域で暮らしていくのか。さまざまな形で学ぶ機会をつくっていかなければならぬと、この映画をつくりながら思いました。

矢代: 現行の学校制度では、同じ学年の子どもたちが同じ教室で学んでいるわけですけれど、夜間中学校では、多様な年代の人たち、外国にルーツを持つ人たちもいる。この多様性が、何かの手がかりになるかもしれません。

参加者B: 映画に出ていた者です。今、都立高校の3年生です。私はずっと学校に行きたかったのですが、形式卒であることが理由で、受入先がまったくありませんでした。教育委員会に電話をしたり、自分が卒業した地区の学校に相談したりしましたが、やはり卒業証書という鉄壁があるがため、受け入れられない。ですが、義務教育機会確保法というのができるて、念願の夜間中学に入学することができました。

夜間中学というのは、勉強する場として最高の環境でした。みんな勉強したいという志があるので、誰も勉強を邪魔することなく、わからないことを互いに教え合うという環境が夜間中学です。年齢も国籍も学歴も性別もまったく関係なく、人としてのお付き合いができる、なおかつ、みんなが尊重し合えるという学校は、たぶん他にあまりないと思います。

ただ勉強するだけだったら、自分で図書館に行って参考書を見たり、

誰かわかる人に尋ねるとかして勉強したと思います。でも、私は、ふつうの中学校でいじめに遭ったことで楽しめなかつた学校行事に参加したかった。いじめを受けていたときの印象は、自分がその環境の中で異物なんだな、家庭環境など他の人と違うからはじきたいんだなという感じがありました。

参加者C:僕は今42歳なんですけれど、4月から定時制高校に入りました。高校を昔やめちゃって。なぜまた通つてみようと思ったかは、夜間中学校のドキュメンタリーをテレビで観て面白そうで。僕はずつとニートみたいな感じで、たまに働いたこともあるんですけど、引き込もりみたいな感じできちゃって。たまたま母が定時制募集の広告を見つけてきて、自分の今後の人生のヒントを得るために、学校はけっこういい媒体ではないかと感じて、あと、心の保険みたいなもので、ひとつ場所があると母も安心するかもしれないと思って行き始めたんです。

4月に入学して、最初の頃はすべてが新しくて、すごく楽しかったんですが、早くも人間関係がちょっとしんどくなってきて、正直、今、通信に移行しようか迷っているんです。そんな中で、今日、みなさんの意見を聞いて、何かまた心の中で変化があって、定時制高校に通うモチベーションみたいなものが、ひょっとしたらまた生まれてくるかなとか思っています。

参加者D:話を聞いていて特別支援学校に実習に行つたことを思い出しました。一人ひとりが体の動かせる部位も違うし、考えていることもちょっとずつ違つて、先生方もそれをサポートするという姿勢で、行事も普通の学校以上にいっぱいあつたので、あの場所で私も学べていたら、もっと人間関係的にも楽しかつたかも知れないとちょっと彷彿としました。

参加者E:私は仕事上、教育関係のところにいるので、これまで不登校の子どもたちや、外に出てこられない子どもたちの家に行って勉強を教えたり、定時制の高校に行くサポートをしてきたんですが、学びの機会が得られなかつたという高齢の方がこんなにいらっしゃるんだと知つて、自分の無知を恥ずかしく思いました。

私はわりと学校に順応してきたので、学べたことのありがたさをよく

囁み締めないできたんですけども、全日制にしても夜間にも、学校っていう場所で学んだことが、多くの人たちの中で自信というか、核となるものとして良き作用となるのだなと改めて思いました。学校で学ぶことが、ただ知識を得るだけではない社会とのつながり、小さい子だったら初めての社会との出会いというか、自分と社会のつながりの中の本当に核になるような存在なのかなと改めて思いました。

それともうひとつは、20年ぐらい前にオランダに行ったとき、公民館でオランダ語を無料で学べるところがありました。それは政府が難民の方たちの生活を応援するために無償で行って就職支援をするという取り組みでした。学校というカテゴリーがもっと柔らかくなつて、いろんな形でできていつたらいいなと思います。

夜間中学校——創造的な教師、〈人〉としての出会い

森：撮影していても、夜間中学は非常に心地いいんです。その理由として、ひとつは競争主義がない。みんな歳も、出身地も、人生も違う。そういう中で競争しても意味がない。だから、進学のための勉強ではない。その人が本当に一つひとつ理解していく、知識を増やしていくことに力を注ぐことができる。もうひとつは、誰をも排除しない。柏の自主夜間中学には聴覚障害の方が来ていました。どうやって教えるのか聞いたら、船橋の手話通訳の方が一緒に来て通訳する、と。誰が来てもいいよと言っているのだから、できる人がいないことを理由に断るということはできない、と。そして、かえって自分たちの知らないことを教えてもらう。例えば、聴覚障害の方が文章を書くのが苦手なのはなぜか考えたとき、手話には助詞がないことがわかつてくる。それに対して新しい考え方を創造していく。また、夜間中学に来る人たちは高齢者が多い中、3年間で小学校からの漢字を勉強するのはとても間に合わない。それに対して、国語の先生が何年かけて、生活に必要な区役所や駅に行って漢字を精選し、「生活基本漢字381字」というのを編み出した。381文字を覚えると、新聞がおよそ70%ぐらいは読めるというんです。そんなふうに教師が創造的で、生徒にとっても排除と競争がない。分断がない。それが夜間中学ですね。

参加者B:夜間中学では、誰一人、置いてけぼりにされている生徒はいませんでした。わからなかつたら、わからない子がわかるようになるまで授業をする。中断してもその子の質問に答えてくれるときもありますし、もしそのときは教えられなくても、ちゃんと後で回答してくれるというのが、夜間の先生方のスタンスだと思います。これは多様な生徒がいるからかなって感じます。

参加者F:全日制の学校の先生も同じように教えたいという気持ちがあると思うんですけど、なぜ夜間の先生のように丁寧に教えることができないのでしょうか。もちろん生徒の数の違いはあると思いますが。

参加者G:私は1976年に初めて夜間中学を見学に行きました。そのとき20歳で受験勉強に疲れ果てて、精神的にもおかしくなっていたんですね。だから、自分の心のリハビリのために行ったような面もあります。そこで職員会議に出させてもらったんですが、若い先生が、韓国から日本に来た生徒の職場訪問について報告したんです。すごく労働環境が悪くて、切粉が目に刺さったりして本当に危ないという話でした。その会議での先生方の発言から感じたのは、夜間の先生は単に教えたいだけでなく、生徒を人間として大切に思っている。人として出会って、その人が大変な状況にあって学びを必要とするときに、自分の力で一生懸命応えようと最大限の努力をなさっていると感じました。その姿勢が生徒にも伝わり、一番の励ましになるのだと思います。今の昼間の先生方にもそういう志はもちろんあると思うんですが、やはり忙しいし、全体として管理教育が進んでいる、その中でどうやって抵抗するかということが重大な課題かなと思います。

理解のあるところに行くだけで救われる

参加者H:僕は横浜市から来まして、今は牛久の祖母の家にいます。僕は自閉症スペクトラムのアスペルガー、つまり、発達障害、障害者です。夜間学校の存在は今回ここで上映された『こんばんはII』を観て、初めて知りました。令和の間にぜひとも広めていくべきだと思うんです

けど、その一方で、夜間中学を進めるにあたって専門性を強めるべきじゃないかと思います。

それは、つまり障害への理解です。僕は0歳のときからアスペルガーと診断され、小学校も中学校も公立なんですけど、個別級という障害者用の理解のある教室に通いながら9年を過ごしました。中学のときにはいじめが2度ぐらいあって、心が挫けて、苦しんだときもありましたけど、障害に理解がある先生方、そして両親の助けもあってここまで生きてきました。だけど、社会人になると、自分の障害に対して初めて嫌悪感を抱いていくんですね。

僕にはとても重い知的障害のある兄がいて、その兄は、言語も話せず、体の制御も……ただ衝動のまま生きているような感じだと想像してみてください。その人が果たして、本当に教育を受けて一人前の社会人になれると思いますか？ ふつうだったら、それは無理な話だろうと。だけど、作業所に通いながら、安定した1日を送っています。それは、やはりその人を理解してくれる人が、親が、そばにいたから、彼は助かっているんだと思います。

理解のあるところに行くだけでも救われる人はいるのだと思います。一方で、誰にもわかつてもらえず、かつ、誰も接触してこない人もいますし、アスペルガーを持つての障害者は、たくさんいると思うんですね。

夜間中学をぜひ増やすべきだということ。それに加えて、発達障害者、知的障害者、そして身体も精神も含めていろんな障害の専門家を増やして夜間中学に投入すべきだと思うんです。人にはない才能を持っている人を、学校や教育の中で、潰されないような形で何とか生かすべきじゃないかと、僕は思うんです。

(拍手が起こる)

参加者I：27年間夜間中学の教員をしてきました。今も足立第四中学校の社会科を担当しています。入学担当もしていて、入学を希望される方には、公立の夜間中学は義務教育の学校なので、「週5日、必ず来てください。土日の行事にも必ず参加してください。もしそういう条件が整わないんだったら、整えてから来てください。この1年間は、ともかく勉強に精進していただきたい」と今まで言ってきた。そのことが、

障害のある方や様々な事情で夜間中学に入りたいと思っている方たちの壁になっていて、非常に申し訳ないと今の話を聞いて思っています。けれども、税金をもらって行っている学校なので、やはり多くの方たちに理解されるような形で運営していかなければいけないとも思っています。毎年夏に国会で、研修交流会というのを開いていて、その中で、今後つられる夜間中学がどういう夜間中学であってほしいか、さまざまな要望を出しています。例えば障害が重いため就学猶予とか、就学免除を受けられた方たちとか、特別支援学校の課程では生活に必要なものは習うけれども、教科学習がほとんどされてないっていうような状況の中、それを勉強したいと思っている方たちにもう一度夜間を利用してただくことについて考えていかなければいけないと、専門の方々と一緒に要望を上げて、障害のある人たちが夜間中学で十分勉強できるような環境を、私たち自身が用意しないといけないと思っています。

義務教育機会確保法という法律も、卒業生や多くの方たちに国会議員の前で話していただいてつくり上げることができたんですね。その後の見直しが来年に迫っていて、私たちもまた全国大会を開いて、夜間中学の間口を広げていくためにこの法律を少しずつ変えて、もっといいものにしていかなければいけないと思っています。

参加者J:障害って、結局突き詰めて考えれば、人と人との関係の問題だと思うんですよ。人と人との関係のあり方を変えれば、障害は障害でなくなるので。何が障害かっていうのは社会的に決まってくることですから。生活しやすいかどうかとかいうことは、社会的に変えられるので、それを支援する人に私たちもなっていく必要があると思います。教育に関して言えば、憲法26条で「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。」というふうに書いてあるわけですから、どういう人であっても受けられる制度にしなければおかしいと思います。

矢代:「学びとは何か」とか「学校とは何か」という問い合わせでしたが、夜間中学の人たちがすごく生き生きとして、とても幸せそうに見えることの理由のひとつは、みんな勉強したいっていう思いをまっすぐもっているということが大きいと思います。それは人間がそもそもみんな持つてい

るものだと思うんですけど、途中で挫折してしまうことが、現行の学校制度にはあるのかもしれない。すごいな、ワクワクするな、もっと知りたいな、何だろうこれっていうような、そういう思いをきっと子どもは最初持っているのに、だんだん、もしかしたら挫折しているんじゃないかな、そんなことを感じました。

「学校って何か」という問いへのヒントが何度も出てきました。多様な人たちがいて、それぞれ人として尊重し合っているというお話。ただ学ぶだけ、ただ知識を得るだけだったら、1人でもできる。でも学校というたくさんいろんな人がいる場で、学びという営みをするということがかかけがえのないことなんだろうなと感じました。



文字起こし：笠井峯子（笠井編集室）
編集：竹久 侑（水戸芸術館現代美術センター）、笠井峯子
デザイン：石井一十三（水戸芸術館現代美術センター）

発行：水戸芸術館現代美術センター©2019
〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

発行日：2019年10月
禁無断転載

「アートセンターをひらく 第Ⅰ期」
2019年3月2日（土）—5月6日（月・振）
水戸芸術館現代美術ギャラリー

水戸芸術館
ART TOWER MITO